# 変わる道徳教育

## 論点

道徳が正式の教科となる。小学校は2018年度、中学校は19年度から、検定教科書を使った授業が始まり、児童・生徒の評価も行われるようになる。安倍政権の教育改革の一環として決まった道徳の教科化を巡っては、愛国心教育強化を懸念する声も少なくない。どう考えたらいいのか、道徳教育に詳しい専門家に聞いた。　【聞き手・湯谷茂樹】

## 深く多面的に考える場

松下 良平
武庫川女子大教授

これまでの道徳の授業は、副読本などを使って「答え」を読み取らせるものだった。それが、学習指導要領の改定で「考え、議論する道徳」に方向転換することになった。「多面的・多角的に考える」との言葉が目標のなかにあり、従来の心情に重きを置いた道徳が、思考中心の道徳に変わる。高校の公民科に新設される科目「公共」との接続を見据え、小・中学校での道徳科は、市民として自己や社会について考える訓練をする場と位置づけることも可能になる。

国民国家の学校が取り組む道徳教育は、単なるしつけとは違う。国民の権利の尊重が原点で、民主主義が大原則になる。社会について学ぶ時も、価値に焦点を当てる道徳は、社会科とは違ったアプローチができる。

例えばルール。「守る」ことがつねに正しいわけではない。ルールによって苦しんでいる人がいれば、その人の声を聞き、実態を確かめ、適正な手続きに従って変えることが必要な場合もある。愛国心は排外主義につながる危険性をはらむが、その原点は同胞や土着の文化への愛だ。自分たちの税金を名前も知らぬ国民の貧困対策などのために使う理由になることもある。

このように多面的に考えることは、問題を深く読み解き、口先ではなく本気で考えることだ。答えは簡単には出ないが、大人になって直面する政治などの問題は、正解がないことも少なくない。現場で、いい実践例が蓄積されれば、例えば愛国心を巡る反対・賛成の不毛な対立はなくなっていくだろう。

＝幾島健太郎撮影

道徳科では評価も導入される。教師には戸惑いもあるようだが、どれだけ深く多面的に考えられたかを評価してほしい。人間性の品定めのような人物評価や心の内面をのぞき込む評価は、教育的な評価とはいえず、子どもを萎縮させ追い詰めかねないので、避けねばならない。

考え議論する道徳科には大きな可能性がある。とはいえ、高いハードルがあるのも事実だ。「正解」を求める従来の方法に多くの教師や教育委員会は慣れており、十分な研修が必要だ。新しい道徳教科書作りの準備期間は短く、今回は急造のものが少なくないだろう。今後は教育だけでなく、政治、哲学、経済、科学などさまざまな分野の専門家が加わり、教科書を大胆に変えていく必要がある。

一方、教科書への政治介入の危険性も否定できない。しかし、何もせずにいたら、問題山積の社会は変わらない。入れ物はできた。今度は教師と市民と研究者が協働して中身を充実させていく番だ。社会をよりよくするとはどういうことであり、そのためにはどうすればいいのか。国民的な議論が大切になる。

まつした・りょうへい
1959年、鹿児島県生まれ。京大大学院学修認定退学。金沢大教授を経て、武庫川女子大教授。教育思想史学会会長。「道徳教育論」「道徳教育はホントに道徳的か？」など著書多数。